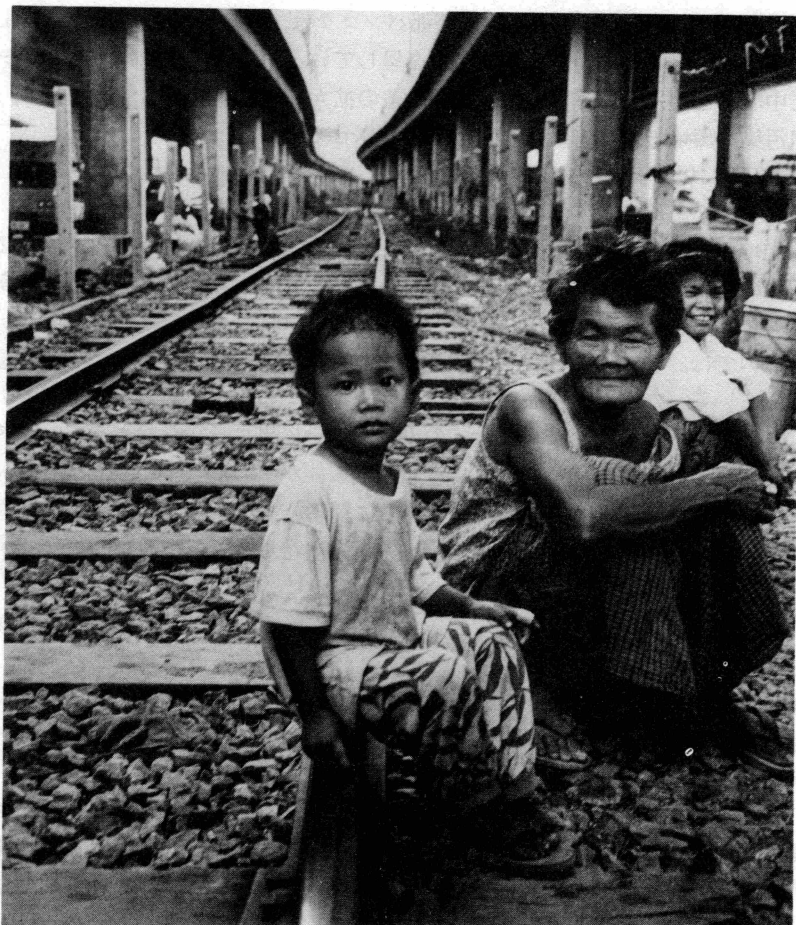


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.105

試 行 錯 誤



高速道路の下に仮住まいする出稼ぎの一家 (撮影) 阿佐部伸一

特集 変わりゆくタイ

岐路に立つ開発プロジェクト	3
難民政策の変更	6
バンコクー大きなネズミ捕りの街	8
スラムの少年物語 おれはトン、クロントイが好きさ	10
最近のタイの変化について思うこと	12
意外なミゾがあった日本とタイのNGO	14
統計に見るタイの現況	16

タイの変化とJVCプロジェクト

ここ数年のタイの急激な変化には目を見張る。経済成長率は10%を越え、急速にNIESに接近している。特に首都バンコクは、外国企業の進出ラッシュによる土地ブーム、建設ブームで活況を呈している。活発な経済の動きは、一部で中間層を生んでいるものの、貧富の差の拡大、地価高騰による追い立て、大気汚染や環境破壊など新たな問題を生じさせている。

JVCは1980年よりタイで活動が続けてきたが、これらの社会変化に対し各プロジェクトは新たな対応が迫られている。

土地の高騰はスラムにも及び、これまで住んでいた人の追いたて、新たな富有層の参入を招いている。十分な教育を受けられなかった人々は、求人の高学歴化によってなかなか職につけず、てっとり早い収入としての麻薬に走る。今スラムでは、学校にも行かず仕事もしない少年たちの存在が大きな社会問題となっている。クロントイ図書館は、コミュニーの変化とともに今までのようなコミュニティーセンターとしての役割を十分に果たせなくなっており、スラムが抱える問題に対処できるような新たな機能が求められている。

一方奨学金活動は、スラムの子供たちに奨学金を提供する団体が多くなり、奨学生の人選が難しくなったため、地方の子供たちを対象に活動を広げていくことになった。

農村開発はJVCにとって比較的新しいプロジェクトなので大幅な変更はない。むしろこの活動は今タイが抱える矛盾の1つの解決策として考えられたものだ。輸出振興策による森林伐採、そのあとの換金作物の栽培、肥料・農薬の購入、借金、出稼ぎと続く流れを変えることを目的としている。この複合農業をいかにして農民に定着させるかが当面の課題である。

次に難民関係のプロジェクトであるが、カンボジアをめぐる和平への動きと難民救援にかかわる各国の疲れから、昨年来急速に“解決”に向けて動き出した。今年になってタイ国内の難民キャンプの統廃合があいつぎ、カオイダンの技術学校は本国自主帰還を念頭に置いたプログラムに切り替えている。パナニコムにおいても、プログラムの終了時期を再来年に決めるなど、終息の方向へ向かっている。

今タイはASEANの“日本”をめざし経済成長を続けている。タイの文化や商品がラオスやカンボジアにどんどん流れている。かつて日本製品に囲まれたタイを皮肉った「メイド・イン・タイランド」の歌が、今はラオスで歌われているという。タイで働く日本のNGOも、物による支援ばかりでなく、近代化による矛盾を抱える仲間として、お互いに助け合わなければならない時期に来ているようだ。

岐路に立つ開発プロジェクト

タイ事業担当 今泉 恵

JVC発足後まもなく、バンコクのスラムで始められた「地域開発」プロジェクトも、変遷をたどりつつ現在は「バンコク地域」と「農村開発」の2つのグループに分かれて活動を継続している。劣悪な生活環境の改善のため緊急な援助が必要だった初期に比べると、それから10年が経過した今のクロントイ・スラムはのんびりとして、援助など必要ないようにさえ見えるが、それぞれのプロジェクトが社会の変化への対応を迫られている。

クロントイ図書館

＜求められるスラムの問題を考慮した活動＞

81年9月に完成し、その後立ち退きによる取り壊し、移転を経て現在に至っているJVC図書館の歴史は、そのままクロントイ・スラム住民の歴史そのものでもある。現在の図書館は87年夏に建てられ今日に至っているが、バンコクに押し寄せる社会的経済的変化の波はここにも容赦なく覆いかぶさってきている。

舗装道路の両側に、スラムの家々を隠すかのように林立する長屋式のタウンハウスの建設が始まったのは88年の夏であった。この地域を港湾局から借り受けている住宅公社が許可を出し、タイの企業が建設したものである。一軒が4～5階建て、10～16軒が一棟になり、その総数は10棟を越える。一軒は60～70万パーツで売られ、あっという間に完売になった。買い手はいわゆる中産階級以上、大方が中国人とみていいだろう。ほとんどの棟が完成した現在、既に何軒かは一階で開業している。米屋、質屋、クリニック、薬屋、そして写真屋までも。もちろん彼らは「新参者」であって、もともとこの住民にはとても手が出ない。地価高騰はバンコクでも深刻で、このタウンハウスが建てられた空き地はスラム内と言っても市の中心にも近く、格好の立地条件だったわけである。図書館周辺の家は下水は垂れ流しだが、このハウスはもちろん下水管を埋めてから建設していた。上水道・電気がひかれていることも業者がと



クロントイ図書館から見たタウンハウス（右）

びついた大きな要因と思われる。衛生上の問題が援助や技術によって改善されるほど、裕福な人々においしいところを持って行かれてしまうというのはなんとも皮肉である。

さて、このJVC図書館のひとつの特徴といえば、司書担当のサムルアイが家族でここに住み込んでいることである。JVCのスタッフであると同時に地域の住民でもあるということは、図書館が位置する1・2・3地区との結び付きを強めるのに役立った。本や新聞の閲覧、近郊のスラム内図書館への本の入れ替え、子供たちを中心にビデオ・映画などの視聴覚教材の上映など図書館本来の機能を果たすだけでなく、サムルアイは地域委員会のミーティングにも参加し、仏教行事や子供の日のお祭りを共同で企画・運営するなど、地域にとけこんだ活動を展開してきた。在バンコクの日本人主婦ボランティアが毎月企画し、スラムの子供たちを集めて図書館で行っている工作指導でも、先生役を務めている。

しかし状況は必ずしも明るいとはいえない。図書館内に張りだしていた求人広告が見えなくなった。労働省の情報では、要求される学歴が大卒あるいは低くても高卒で、とてもスラムの人々に応じられるものではない。またクロントイの住民というだけで断られることもあるという。サムルアイは何度も造花や電気の配線などの内職クラスを設けようとしたが失敗に終わった。内職に精を出すより、ヘロインを売った方がはるかに儲かるからだ。私が図

書館の2階の事務所へ通っていた頃、近所の食堂（というより家で食べ物を余計に作って売っているといった方が適切かもしれない）が突然営業しなくなったことがあったが、話によれば違法とされているトランプ賭博で勝つと営業しなくなり、負けると店を出すのだという。6月から始めた夜間識字教室も大人たちは仕事の後なのでなかなか来る元気がない。

開発されつくしたようなクロントイスラムの中で最近目だっているのは、スラム内の貧富の差が拡大していることだ。前述のタウンハウスが出来る以前に、すでに入ってきた華僑は立派な一軒家を建てていたし、ベニヤとトタンで辛うじて雨露を凌いでいるような家並の中にしっかりと作られた木造の家が増え始めた。外から入ってきた中産階級と麻薬で儲けたスラム住民が、スラムでなければ住めないような低所得者をじわじわと追いつめているのである。いわば地上げ同様の手段で、貧しい人たちは他のもっと環境の悪いスラムへと移っていく。高速道路建設や、海外からの投資家に土地を売る目的でのスラム住民立ち退きとまた違った性格の「追い出し」が行われているといってもいい。今やこの地域の住人を「スラム住民」という名称であっさり片づけることはできなくなっている。

もうひとつは麻薬やシンナーの問題である。いまに始まったことではないが、密売のみならず、最近特に青少年の常用者が増えている。逮捕されて更生施設に入れられても、麻薬に頼ってしまうような状況が改善されない限り、スラムに戻ればまた元の黙阿弥である。

学校に通えない、あるいは学校には通えても本など買う余裕のない子供たちや、文字に触れる機会の少ない大人のための非公式な教育の場を提供してきた図書館であるが、単に地域住民のためのコミュニティセンターとして機能するだけでなく、地域の問題に前向きに取り組んでいく施設としての役割が求められている。

奨学金プロジェクト

＜対象者を農村部に広げる＞

めざましい経済成長を遂げているかのように見えるタイとはいえ、社会の底辺に属する人々の生活は良くなるどころかますます苦しくなっている。タイでは小学校6年までが義務教育であるが、スラムの子供だけをとってみれば小学校の就学率は8割を越

える一方、中学への進学率は3割に満たない。

奨学金プロジェクトは、学費はかからないが制服や鞆を自前で揃えなければならないバンコクのスラムに住む小学生のために、前期・後期の初めに500バーツずつ費用の補助を出すことで始められた。中学へ進学したい児童には引続き奨学金を出し、年間2000バーツ支給している。また日本でも毎年定額を募金する里親を募り、子供と里親を一人ずつつないで毎年里親に子供の状況報告書を送る形をとった。60人で始まったこの制度も、もっとも多い時期で250人、現在はバンコクに142人、南部被災村に47人、東北タイに約20人の奨学生がいる。

子供の選定は学校の先生の推薦を受けた子供をスタッフが実際に家庭訪問して決定した。タイ人スタッフは一人だけなので、限られた支援人数の中バンコクの奨学生は単に経済的に苦しいだけでなく、両親の離婚や虐待に直面している子供を優先的に援助するようにした。もちろん、支給額を返還する必要はなく、成績の善し悪しで子供を選ぶわけではない。

奨学金の支給、家庭訪問、学校訪問、報告書の作成などの業務の他、担当スタッフは月一回の子供会、年一回の子供キャンプなどの企画・運営を受け持っている。子供会では映画の上映、ゲーム、工作などを学校やお寺で行い、キャンプはスラムや街中しか知らない子供たちに自然を体験させ、また他の地域に住む同じような境遇の子供たちとの交流を通じて協調性を身につけてもらうことを目的としている。

南部では88年末に森林伐採が原因の水害が起こり、何百人もの死傷者を出す大惨事となった。このために家族や農地を失い、他の地域への移住を余儀なくされた子供たちに物資の援助を行い、その後は奨学金の支給を行った。しかし彼らが被災地を離れ各地に移るにつれて追跡調査も難しくなり、90年末の調査を最後に、既に自立可能になった家庭の子供には支給を終了する予定である。

奨学金プロジェクトもいま、少しずつ進路変更を迫られている。奨学金を必要とする子供たちがいることには変わらないが、バンコクでは様々な団体が奨学金を出しているために、どこからももらっていない子供を探すのが難しくなった。卒業もしくは退学した分の欠員を補充するためには、他の学校で探さなければならない。しかも、千以上もあるスラムのあちこちに住んでいるから、いくら総数が200人とはいえ、家庭訪問にさく時間も馬鹿にならない。奨学生の通う学校の総数もバンコクでは42にのぼる。

奨学金の制度自体を維持するのがやっとで、子供たちの悩みを直接聞いたり、家族とも密接な関係を保っていくような活動ができない。4年間こうした作業を繰り返してきたリは、エネルギー切れを理由にJVCを去った。

タイ人、日本人ともスタッフが入れ替わった90年5月より、JVCでは新しい方向を打ち出すことで合意した。まず、バンコクでは支援中の児童は卒業もしくは退学まで面倒を見るが、新しい子供は探さず、対象地域を農村部に移していく。農村では寺や学校（二者が一体のこともある）が村の中心で、ほとんどの子供が同一の学校へ通っているため、訪問がしやすく単に奨学金を配るだけではなく、学校の先生、両親を含めて問題を考える場を持つことが出来る。個人の報告書制度から、小冊子制度に変更し、里親には子供の生活状況だけでなく、タイの全般的な問題を知ってもらう機会を提供する。実際スラムは目をひきやすく、農村の問題は見過ごされがちであるため、スタッフは農村プロジェクトともタイアップしながら、出稼ぎにきてスラムに住まざるを得ない農村の状況を知らせようと意気込んでいる。現在各地で調査を継続中である。

農 村 開 発

<複合農業が根づきつつある>

スラム住民のほとんどが農村、とりわけ東北タイの出身者である。彼らがバンコクに出てこなければならなくなった状況を変えていかない限り、根本的な問題の解決にはならない。87年の調査を経て、88年5月からブリラム県ムアンフェーク村とノン・ノック・キアン村で開始した農村開発も3年目に入り、多方面にわたる活動を展開している。

JVCが推進している複合経営農業を始める村人も増加した。米やキャッサバなどの単一作物栽培から、池を掘って魚の養殖を行い、果樹・薬草を植え、家畜を飼い、その他養蚕、キノコ栽培など少しずつでも多種類のものを育てる方法へと切り替えていく。限られた土地の中で収穫を増やし、家計の現金支出を減らし、農閑期の失業をなくす。水や家畜の排せつ物を利用し、天然資源を循環させる。現金収入を換金作物に頼らず、市場経済の危険を回避する。多種の作物で食生活も豊かになり、年中なんらかの収穫がある。こうした性格を持つこの農業を、JVCは換金作物栽培－肥料・農薬の購入－借金－出稼ぎの悪循環を断ち切れる方法であると確信した。複合経

営農業を取り入れて給食を始めた小学校では、子供たちも農作業に参加し、お母さんたちも給食作りを手伝っている。

これと同時にスタッフが力を入れているのは伝統医療の復興である。伝統医療師たちを組織して勉強会を行う、他県まで研修に行く、薬草サウナを建設するといった活動のほか、森林の保護・植樹も積極的に行っている。伝統医療の尊重は、単なる医療費の節約ではなく、いわば近代化への挑戦でもある。本当に身体のためになるもの、安らかな生活を保証するものは、近代医学ではなく昔から伝わる知恵や習慣にあることに気が始めた人は、村でも少なくないであろう。日本ではとても体験できないような贅沢な医療が、ここで広がり始めている。

また、雨水タンクや農業用灌漑設備の建設など、学校への援助も広げ、一方で草木染めの織物制作や生活協同組合の設立など、婦人たちの活動も盛んである。貧しい村人に低利で貸しつける水牛銀行や米銀行の準備も進んでいる。

最初の一年は、JVCのスタッフが何をしようとしているのかを村人に理解してもらうために費やされたといってもよかった。しかし根気よく村長や学校の先生、僧侶を中心に話し合いを進め、そうした努力が実を結び、村は自給自足に少しでも近づけることを目指して歩み続けている。だが喜ぶのはまだ早い。複合経営農業も当然のことながら一朝一夕に結果が出るものではなく、干ばつや天候不順でなかなか思うように行かない年もある。したがって、バンコクや海外に出稼ぎに行く人はまだ多い。そして、換金作物に頼らない「もうひとつの生き方」に賛同しているとはいえ、村人はまだプロジェクトの推進者を必要としている。それでもいつかはJVCに頼ることなく村人が自力で現状を切り開いていかなければならない。少なくともあと2年はこの場に腰を据えるが、テクニックを伝えて行くだけでなく、村人の中から後継者を育てて行くことが今後の課題となるであろう。



（撮影）阿佐部伸一
スキを引く農民

難民政策の変更

第三国定住から本国帰還へ

パナニコム日本語学校 竹村雅義

ベトナム難民と資格審査

1989年3月、タイ政府はベトナム難民の「足切り日」を発表し、「難民資格審査」を導入した。この措置は、一次庇護国の難民受け入れが困難になってきたことと、ボートピープルの流入を抑止することを目的にとり入れられたものだ。これにより今まで自動的に「難民」とみなし、受け入れていた一次庇護国政府の方針を大きく変えることになった。つまり「難民認定」を受けなければ、今後は第三国定住の資格を得ることができなくなったのである。同時に難民としての質も問われることになり、難民であるかないかで、その後の対応に大きな変化をもたらすことになった。

現在パナニコム・キャンプには2万5000人ほどの難民が収容され、第三国に定住する日を待っている。しかし、ベトナム難民への対応はラオスやカンボジアの難民とは異なる。ボートピープル、ランドピープル（陸路の難民）としてタイに到着するベトナム難民は、正確には避難民（asylum seekers）で「難民資格審査」を受けなければ難民として認められない。現在のベトナム避難民の数は1万2000～1万3000人なのでキャンプの人口の半数以上は難民ではないわけだ。そのため、彼らに対する国連、民間団体（NGO）の援助や協力も制約され、充分ではないのが実状だ。たとえば難民として認定された人々は、第三国定住をするのに必要な教育、職業訓練などが奨励されるが、難民として認められなければそれらを受ける機会はない。（例外的に子供たちに対する母国語の教育は認められている）それは彼らが難民ではないという理由による。そこには第三国での生活を夢見るような甘い現実はない。彼らの居住区は他の居住区とは区別され、鉄条網やトタンのへいで仕切られ監視されている。“一平方メートル”，この数字は少し極端かもしれないが、ベトナム避難民の人たちが住むために与えられた居住空間である。コンクリートの土間の上をビニールやカーテンなどで各々が工夫して仕切り、部屋として使っている。この生活環境を改善するために現在も拡張工事を行っているが、急増する避難民に対応するのに精一杯と

いうところだ。彼らには生きるための活動や権利、そして自由は認められていない。生活を維持するための食料、水の配給も十分ではないなかで、明日のわずかな可能性にすがっていくしかないのが現状だ。もっともそれは難民となっても基本的には同じなのだが。

ここにカナダに定住していったひとりのラオス難民の手記を紹介したい。彼の言葉がすべての難民の声を代弁しているわけではないが、日ごろ私たちに語ることをのまない難民の声なき声を語っているように私は思う。

「眠る場所も何もないとき、祖国がいかにありがたいものかわかるようになる。難民キャンプには失望した。自由も権利もなく、眠るため、生活するためのわずかな空間があるだけだ。監獄のようなものだ。ナボー・キャンプには6年滞在したが、これだけの長い時間を無為に過ごしていた。私にできたのはただひたすら自由が得られる時を待つことだけだった。しかし生きることについて学び、理解できたという点では決してむだではなかったし、今後に生かせるような経験ができたことはたしかである」

本国自主帰還の奨励

昨年からはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を中心にベトナム難民に対する「本国自主帰還プログラム」が始まった。これは今年の6月ジュネーブで行われたインドシナ難民国際会議で採択された「包括的行動計画」（CPA）に基づくものだ。「包括的行動計画」とは、ボートピープルなどのように非合法的形で密出国することを抑止するために、合法的な出国や移住を奨励するとともに、難民資格審査にもれた場合は第三国定住の可能性がないことなどを広く一般に宣伝すること、また同時に難民と認定された人々に対しては積極的に第三国定住を促進していくというのが行動の基本案である。今回の会議では定住受け入れ諸国から合計5万4000人分の定住わくが新たに提供された。これはASEAN諸国が発表した「足切り日」以前に一次庇護国にたどり着いたベトナム人に対して、むこう3年間に定住可能な限度わく



を示したものだ。日本政府も1000人の定住わくを提供することを明らかにした。

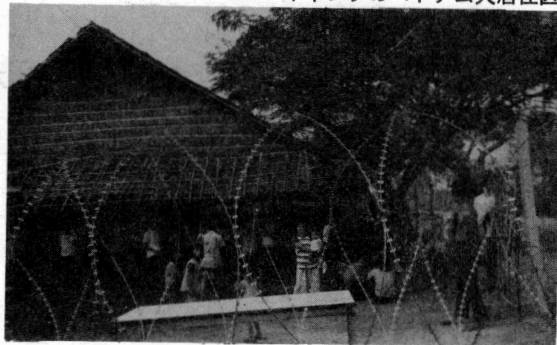
バナニコム・キャンプでも UNHCR を中心に、毎日のように避難民との面接がくり返され、現在置かれている状況や将来的に定住できる可能性が少ないことなどを説明し、「本国自主帰還」することを奨励している。最近になって徐々に自主的に本国帰還を希望する人たちが出てきたが、まだまだ道のりは遠い。(9月末日までに173人が本国自主帰還した—UNHCR 資料) また「難民資格審査」を受け、難民として認められなかった人たちをどうするか、という問題が残っている。タイ政府はシクウ・キャンプを再開し、そこに難民ではない人たちを収容していく方針だが、まだ具体的にどのような形で「本国帰還」されていくか明らかではない。

いずれにしても「本国帰還」の動きはタイだけではなく一次庇護国全体の動きになりつつあるが、私にはまだ「本国帰還」という言葉だけが先行し、どこかで難民の一人一人の思いとかけ離れているような気がする。

今タイではバナニコム・キャンプだけでなく、他の国内にある難民キャンプも同じように「第三国定住」から「本国帰還」へとキャンプの機能が変化しつつある。

今年の9月、タイ政府はバンナポー・キャンプにおける第三国定住のための面接調査を打ち切った。また、カオイダン・キャンプでは昨年5月に面接調査が打ち切られ、今年1月から「カンボジア本国帰還者のための技術訓練センター」へと名称を変更し、そこでの NGO の活動も帰還に向けての協力という

バナニコム・キャンプのベトナム人居住区



ように変わった。面接調査が打ち切られた今、そこに残された人々がとる道は「本国帰還」しかないわけだが、難民の人々の意識の底には、まだ「第三国定住」へのわずかな可能性に希望を託している人が多いことも事実のようだ。

政治に左右される難民キャンプ

今もタイ・カンボジア国境には30万人の避難民がいる。ポル・ポト、ソン・サン、シハヌーク各派の勢力下にいる人たちだ。現在、UNHCR、タイ政府、各国 NGO などが中心となり「中立キャンプ」の構想について考えている。各派の影響力のない中立のキャンプを作り、段階的に国境の人々を収容し、カンボジアへ帰るための技術訓練をするという構想だが、経済的にも政治的にも難しい問題が残されていて、実現までにはまだまだ時間がかかりそうだ。帰還するためにはまず国内の政治的解決が優先される。

難民キャンプは政治的な状況によって左右され、またそこにいる難民も同じように政治の大きな流れによって翻弄される。それはインドシナの難民問題が10年たとうとしている今も変わってはいない。第三国定住という難民問題の解決方法が採択されてから110万人もの難民が定住してきたが、今もなお難民が出続けているという事実をどう考えたらいいだろうか。そして、定住していった人たちのその後の人生にどのような影響をもたらしているのだろうか。私たちの今後の活動のあり方も含め、見直し検討すべき時期に来ていることを強く思う。

なお、バナニコムの日本語学校は日本行きを希望するベトナム難民がいないため、ラオスの難民がすべて日本に行くと思われる1992年3月末をめどに、プロジェクトを終了することを決定した。キャンプ内で活動する他の団体も、それぞれプログラムの縮小、終了に向けて動き始めている。

バンコクー大きなネズミ捕りの街

坂根 宏治

＜テレビのあるスラム＞

スラムという言葉から僕たちは何を想像するだろう。ボロボロの服を着た人が、砂ぼこりの巻き上がる中で生活しているシーンであろうか。それとも餓死寸前の子供がよろめいているシーンであろうか。職にあぶれた若者が鋭い視線を投げかける「不法地帯」をイメージする人もいるだろう。また、夕方には家々から炊き物の煙が立ち昇る古き良き共同体を想う人もいるだろう。

誰一人として同じ顔をした人がいないように、スラムも土地により様々な姿を見せる。クロントイ・スラムも「スラム」という言葉だけを頼りにイメージを膨らませていると、実際にクロントイに入った時に「ここがあのクロントイなの」と思わずつぶやいてしまう。

いい生活をしているじゃない。これがクロントイの第一印象だ。路地は狭くてくねくね曲がっている。二人並んで歩けない道がほとんどだ。だけど、コンクリートで舗装された道が多い。また家の中を覗くと、色々な電化製品が見られる。ラジオはもちろんテレビがかなり入り込んでいる。冷蔵庫やオートバイを持っている家もある。ある店では子供たちがテレビゲームをしていた。レストランのジュークボックスからは、タイミュージックが流れてきた。

このような品々を手にするのでできる生活は決して悪い生活ではない。「豊かなスラム」という言葉が浮かんだ。

＜ウアンとの1日＞

クロントイ・スラムの多くの人々が、クロントイ港で働いている。僕はその中の一人、ウアンという男性と1日行動をともにした。朝7時ごろ起き、家を出た。スラムわきの高架道路の下にトラックがある。タイ政府から借りているトラックだ。これに乗り、僕たちは港へ向かった。

港で働いているのは、大人の男性ばかりではない。女性も子供もいる。男に混じってコンテナの荷物を積み込んでいる人。食べ物や水を売り歩く人。港のそうじをする人もいた。

ウアンの仕事はコンテナの荷物輸送である。運ぶ

距離によって異なるが、一回の輸送で50～150パーツの収入になる。仕事がたくさんある日は1日に三度、四度と運搬できるが、一度も荷物がまわってこない日もある。たとえこのような日でも最低100パーツは支払われる。しかし1日100パーツの収入だと生活するのは苦しい。(1パーツ=5.4円)

この日ウアンの仕事はなかなかまわってこなかった。朝8時半ごろからずっと仕事に来るのを待っていた。港にある大衆食堂で昼食を取ってから、ずっと待ち続けていた。ウアンの顔色がだんだん曇ってくるのが手に取るように分かった。午後3時過ぎになってようやく仕事が始まった。中古エンジンの運搬である。フォークリフトで積み込まれるエンジンを、24～25歳の若い男たちがトラックの上で整とんしていた。危険の伴う仕事である。炎天下の中で働いていた男は、仕事が一段落するとうまそうに水を飲んでた。

積み込みの終わったウアンのトラックが、目的地に着いたのは5時をまわったころだった。すでに2台のトラックが港に着いていた。積み込んだ時と同じようにフォークリフトで一つずつエンジンを積み降ろしてゆく。若い男がそれを手伝う。

どうやらこのオーナーは、車の修理工場を作ろうとしているようだった。かなり豊かな生活をしているらしい。この工場の隣には養卵の工場を持っており、1日に1万個生産していると聞いた。一個2パーツとしても2万パーツの収入である。危険な仕事に従事している若者たちやウアンのようなトラックの運転手とは、かけ離れた生活を垣間見た思いがした。

エンジンの積み降ろし作業は時間がかかった。ウアンのトラックがカラになったのは夜の8時半であった。夜のバンコク市街を抜けクロントイにたどり着いたのは、10時ごろである。そしてウアンの今日の収入は、長距離輸送一回で150パーツだった。

ウアンの生活は、毎日が危ない綱渡りである。金を蓄えていくのは大変なことだろう。来年彼は結婚する。幸せな生活が来ることを願っていた。けどそれを口にする、見え透いたウソをつく時のように苦しくて、言えずじまいに終わった。



ウアン（右）にはなかなか仕事がまわってこなかった

＜みせかけの豊かさ＞

クロントイの人々は色々な家電製品を持っている。昼間から家でゴロ寝をしてテレビを見ている人も少なくない。でもクロントイの人々は本当に豊かな暮らしをしているのだろうか。金回りはどのようになっているのだろうか。

個人差は大きいですが、平均すれば日収100～150パーツぐらいだと言われている。夫婦共働きや子供も動員して働いている家族もいるが、行商や売り子をしてよくて50パーツぐらいではないだろうか。

また支出について言うと、食事代だけで家族1日で80パーツ以上はかかると思われる。その他にビール1本買えば40パーツ、タバコ1箱買えば15パーツかかるのだ。

このような生活でどうして家電製品にまで手がまわるのだろうか。彼らは分割払いで家電製品を買っている。新しいもの、便利なものが欲しいという欲求は日本であろうとタイであろうと変わるまい。そして次々と新しい家電製品が手に入る。金が多まらない生活ならまだいい方で、時には分割払いの支払いに生活が犠牲になる。

クロントイの豊かさは、生活の厳しさと背中合わせである。華やかに見える生活も、実のところ決して楽な暮らしぶりとはいえない。むしろテレビがあり、ステレオがある生活は、厳しい日常生活を少しでも華やかなものに見せようとする切実な思いの反映であろうか。

だがこのような見せかけの豊かさは、本当の豊かさを保証するものではない。どこか見えていてアンバランスである。彼らの豊かになろうとする努力は、足元の砂をどんどん奪い取ってゆく。クロントイに

咲く花が、やせた土地からありったけの養分を吸い上げるように。

＜バンコクをめざす人々＞

クロントイ・スラムの線路わきに一つの家族が住んでいる。広さ3畳ほどの所に家族6～7人が暮らしていた。ベニヤ板の上に一枚のビニールシートをかぶせただけの家である。クロントイ・スラムの中にもう土地はない。たとえあっても土地代を払わなければならない。だからここで暮らしているのだと語っていた。

クロントイはもう飽和状態である。クロントイばかりでなく、バンコクが飽和状態になっている。交通渋滞、排ガススモッグ、建設ラッシュ、家賃の上昇。バンコクは、東京の汚点を全て兼ねそろえた街のように見える。

バンコクから抜けるとすぐに田園風景が広がる。どこまでも続く稲穂が風になびいている。そして視界の果てには森がある。熟れすぎた柿のように赤い夕日が森に沈んでゆく。そこには平和で豊かな生活が約束されているように映る。だからわざわざバンコクまでやってこなくても、ずっと素晴らしい生活が地方にはあるだろうに……と私には感じられる。

だが現実とは違うようだ。タイ人に言わせれば地方には何もないらしい。地方には農業以外ほとんど仕事がない。またたとえ農業だけに専念しても、確かな収入が約束されるわけではない。バンコクで成功した者がどんどん金を蓄え、それとともに物価も高騰していく中で、昔も今も変わらず地方で農業を営む者は必然的に貧しい生活を強いられてしまう。

もしかしたら、バンコクに出ても豊かな生活はやってこないかもしれない。しかし地方にいれば豊かになる「チャンス」すらない。どんどん落ち込むばかりである。だから人々は、わずかなチャンスに全財産をかけ、バンコクへと向かう。故郷の広大な土地を売り払い、大金を携えてバンコクへやってきた男が、バンコクで小さな家を買えば、金は一銭も残らなかったという話もある。故郷の家を失った者にもはやふるさとはない。

バンコクはネズミ捕りのような街だ。ネズミ捕りに入るネズミのように、バンコクへと向かうことはできても、もはやバンコクから逃れることはできない。一方通行なのだ。

カゴの中のネズミはいつ自由を手にすることができるのだろうか。見せかけでない、本当の幸せというものは、いったい何だろうか。

おれはトン、クロントイが好きさ

池島千津子

毎日、何してるかって？ うーん、別に特に何かをするってことなんかないね。毎日、朝は8時ごろに起きるよ。弟妹がいるし、家が狭いだろ。ゆっくりなんか寝てられないよ。母ちゃんが働きに出る時は、その後また寝たり、洗濯したりする時もあるけど、だいたい何もしないでラジオでポップスを聞くのが好き。母ちゃんが朝から酒飲んでるときは怒鳴るしキチガイになってるから、すぐ外に出ていく。毎日、その辺りをブラブラしてるよ。金がある時はシンナー吸ったり、近場で仕事があればそれをやったり、知合いから頼まれればおかずを買いに行ったりもするだろう。シンナーはいい匂いだし気持ちがよくなって最高！ ふだんは恥ずかしくてやらないけど、ラリってると歌を歌ったりして歌手の真似なんかやる。家の近くでやって、前に死ぬほどかあちゃんからぶん殴られたことがある。たいていはごぞんじの通り、JVC図書館の裏のほうでやってる。酒はちっとも飲みたくないなんて思わないけど、シンナーはやめられない。だけど麻薬はもうやらない。タバコに混ぜて吸って死ぬほど気持ちが悪かった。あの時も家に帰るとまずいからJVC図書館の本だの間で寝かせてもらったね。いつもどうもありがとう！ お礼をいいます。

学校は5年でやめた

おれの名前はトン。もちろんクロントイ・スラムに住んでるよ。死んだ親父はシマハポートの出身、母ちゃんはプラチンブリから出てきた。じいちゃん中国人だったって。兄弟は全部で7人います。おれと下の二人が今母ちゃんと一緒に暮らしてる。

なんで今日はそんなにおれのこと聞くんだよ？ 別に悪くはないけど、スプライト飲みたいなあー。ええー、おごってくれるの？ タバコも吸ってもいい？ 今16歳だよ。あんただって吸ってるじゃないか！ 女はタバコなんか吸ってはいけませんよ。なあーんちゃってね、おれの母ちゃんも吸ってる。こんなに高いヤツじゃない。葉っぱに巻いて吸ってるけど、へへ、歯が真っ黒。もう一本くれたら、母ちゃんにあげられるんだけどなあー、嘘じゃないって。

学校は小学5年でやめた。理由は母ちゃんにお金

がなかったから。制服や教科書、それに毎日の昼ご飯代にもお金がいるだろう。勉強するのは好きだよ。学校に行ってた頃、いい子ぶってたわけじゃないけど、授業の後、先生の手伝いをするのも好きだった。絵を飾ったり。ガリバンを刷るのを手伝ったり。その後、先生は職員室で冷たい水なんか飲ましてくれたりした。

学校をやめた後、クロントイ・スラムから市場まで走るミニバスの車掌をやり始めたら、担任の先生が何度も家に訪ねてきて母ちゃんと話してた。他の兄弟も小学5年くらいでやめて働いてるだろ、だれも6年までいってないしね。ああ、死んだ父ちゃんが中学3年までいったとか聞いたことがあるけど、本当かどうか知らない。警察官やってたんだぜ、カッコイイ？ でも麻薬のやりすぎで、母ちゃんと離婚してその後すぐに死んだ。36歳だったって。今でも学校は行きたいよ。でも、もうしょうがない。いまさら小学校なんか行きたくないし、小学校卒業してないと、電気の専門学校なんか行きたくても入学させてくれないしね。

もう売春はしないよ

ミニバスの仕事は1年間ぐらいやってた。でも、シンナーと盗みがみつかってやめさせられちゃった。仕事はきついし朝も早いけど、1日100パーツのいい仕事だったんだけどね。その後、プーケットで働いてた。くつみがきとホテルのシーツのせんたく。給料は一カ月2000パーツ。3食付きで寝るところだってあったよ。暇な時は泳いでもいいし良かったけど、妹と母ちゃんが訪ねてきたとき、クロントイに帰りたくなってやめちゃった。ここは友達もいっぱいいるし、家族と暮らすのはやっぱり好きなんだなあー。

母ちゃんは酒ばかり飲んでるけど、すごく好き。金がある時は弟妹におかしを買ってあげたりもできるだろう。今は一緒に住んでないけど、兄ちゃんや姉ちゃんはクロントイ港で働いている。おれも時々働きに行くけど、あんまり金にはならないし、腹は減るし、仕事はきついから行きたくない。

売春始めたのは去年から。でももうやらないよ。

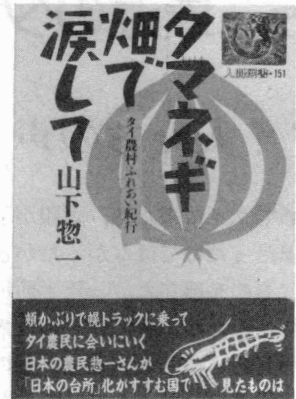
最近のタイを知る本

タマネギ畑で涙して

山下 惣一 著
農文協

●ひとと言えれば、“JVCの活動がよくわかる本”である。森を生活の場としていた人々を追いつく「緑のイサーン計画」、換金作物の連作によるハゲ山、中間業者に搾取される農民たち。開発業者に村ごと売ってしまった村長までできた。米の自由化にゆれる日本の農民でもある作者は、農民たちに出会うたびに彼らの経営状況を計算し、同情する。

現地のNGOの活動もかいま見えてなかなか参考になる、ちょっと風変わりなタイ旅行の記録である。蛇足ではあるがJVCのメンバーでもある正木幹生が一部通訳として同行している。(1,800円)



タイ人たち

ラーオ・カムホーム
星野 龍夫 訳
め こん社

●この短編集は、タイ社会を理解するための教科書として欧米の大学でよく使われているものだ。ここに描かれた人々は、旅行者に微笑みを投げかける“あの”タイ人ではない。借金に苦しみ、ビー（聖霊）や迷信を恐れる農民たちだ。

それぞれの作品は、1950年代から70年代にかけて起きた事件やその時代のタイ社会を背景として描かれているので、タイを良く知る人は、作者の痛烈な皮肉に苦笑するであろう。(1,800円)

マッサージ・ガール

バスク・ボンバイチット
田中 紀子 訳
同 文 館

●バンコクの夜を色どる女たち、その多くは貧しい農村からの出稼ぎ女性だ。この本はILOから委託され、そのような女性たちの実態を経済学、社会学の立場から調査したものである。あらためて、急激な経済開発によって拡大される都市と農村の経済格差が浮かび上がってくる。性産業は貧しい農村の家族に生きる道を提供し、さらに外貨を稼ぎ、深くタイ経済に食いこまれているのである。(1,600円)

本当だってば。警察につかまえられて刑務所に行くのはいやだから。ええ？、この前行ったじゃないかって？あれが最後だって。信じて欲しいなあー。やってた時は夜7時くらいにクロントイの仲間6人とパッポンに行ってた。この前の相手はオーストラリア人。僕ら6人で相手は一人。マッサージとかね、注文に応じてサービスするの。その人は28歳で若い人だった。その時僕は500バーツもらったけど、みんなが同じ額をもらえるわけじゃない。あんまりサービスしなかったヤツは200とか300バーツだったりする。いままで、男とも女ともやったけど男が多かったなあー、でも僕はホモじゃないよ。お金がもらえるからやってただけ。やったあとの気持ちはいい時も悪い時もあるけど、お金で愉快になれるしね。

今度は宝くじ売りをしようと思ったけど、初めの資金がいるんだって。そんな金なんかないからできないね。これからのこと？ あんまり考えたことないよ。でも今まで悪いことばかりやってきたから、20歳になったら寺に入ってお坊さんになろうと思ってる。その後のことはわからないけど金持ちになりたい。そしたら母ちゃんも果物売りに行かなくてもいいだろう。

ずっとクロントイに住みたいんだ

このクロントイ・スラムについてだけど、あの周りを囲むようにしてできた4階建ての建物なんか大嫌い。だから友達と一緒に落書したり、柵を壊したりしてやった。なんかあんなでっかいのが今住んでる所にも建てられて、おれたちはいつか追い出されるんじゃないかって気がするんだ。それについて何か知ってる？ いつか、もしおれが金持ちになったら、ここに住み続けたいんだ。どうしてかって？ ここで生まれて育ったんだから、ここに住み続けたいんだ。好きなんだよ、クロントイ。

あー、腹が減ったなあー、ラーメンが食いたい。あんたの分も買って来てあげるから、お金ちょうだい。ここで一緒に食べてもいいだろう？

ところで相談なんだけど、仕事が終わった後、30分でもいいから英語を教えてくれないか。英語が話せるとできる仕事がふえるんだよ。そのかわり、タイ語を教えてあげるから、頼むよ。ええー、本当？ へたくそだって俺たちよりうまいじゃないか、ABCとかアルファベットから教えてほしいんだけどなあー。いいの、ヤッター！ 何人くらい連れてきてもいい？ 8時から。そいじゃあ、きつとだよ。

最近のタイの変化について思うこと

タイ人たちの声

大石 道子
(JVCバンコク事務所)

初めてタイに来た時、両親が子供の頃はきっとこんな風だったのではなかったかと、何だか懐かしさの様なものを感じた。一年半前に田舎からバンコクに移り住んだが、今ではこの巨大な都市の恐ろしさをじわじわと感じる。建物がものすごい早さで建ち、車が真っ黒い排気ガスを吐きながら疾走するか、全く動かずに渋滞を起こす。歓楽街が立ち並び、巷に物が氾濫する。スラムに住む人が増え続ける。そんな町は、確実に住む人の心を触んでいく。では、タイ人は自分の国のこの変化をどう見ているのだろうか。身近な人々にきいてみた。

クロントイ・スラムの住人

昔は、タイ人は皆、思いやりの心(ナムチャイ)を持っていたのに、最近では自分のことばかり考えている。バスに乗る時、子供やお年寄りがいても真っ先に乗り込んで座ったり、物を貰うことばかり考えて、自分からは何もあげなかったり。それにちょっとしたことで怒ったり、いらいらしたり、性格がせっかちになってきた。そして、信じるものが変わってきた。昔ほど寺に行かなくなったし、病気の時も、前は村のお坊さん等に祈ってもらって治したのに、最近では信じる人が少なくなった。それにしても、バンコクは何でも高くなって、生活が苦しい。

食堂のおばさん

生活費の値上がりがものすごい。うちの様に小さい店は、大きいレストランに比べその影響が大きい。3カ月前、そば一杯を10パーツから12パーツに値上げただけで文句をいわれたけれど、レストランでは30パーツを40パーツにし、サービス料金をとってものにも言われないばかりか、チップまで貰っている。商業税は、一律7パーセントだ。車や人の通りが増えても、周りにどんどんレストランができて、売上げは昔の5分の1くらいに減ってしまった。

近所の人

朝から晩までどこも交通渋滞でやってられない。それにこの物価の値上がりの速いこと。バンコクと

田舎では全く違う。長い時間働いて稼がないとやっていけないから、のんびり家族とくつろぐ暇がなくなってしまった。

ブリラムの農民

今年も雨が余り降らなかった。気象がだんだんおかしくなってるんじゃないかと、心配だ。さらに今年は稲に病気が発生して、去年よりも米がとれなかった。米の売値は下がるし、もう、さんざんだよ。

ポンピモンさん(JVCバンコク代表)

昔はなんでもゆっくりで、お金をかけなくても住むことができたのに、今はお金が必要で、タイにあるものは何でも売れる。土地、選挙の投票権、人までも……。これでは国ですら売ってしまい、もう、住めなくなるのではないかと、皆恐がっている。一番恐ろしいのは、自然環境と家族形態の変化。環境破壊は森林の伐採、大気汚染と、大変な勢いで進んでいるから、王様のお母さんの誕生日に記念植樹した位では間に合わない。また、家族生活では、個人個人が独立し過ぎて、昔の様に協力し合うことが少なくなってしまった。

カモンさん(JVCバンコク事務所)

自分は18歳の時、南部のトラン県、ムアン郡からバンコクに友達、20人ぐらいといっしょに出てきた。田舎では、雇用機会に恵まれないから。来たばかりの時は、(もう、今から15年前になる)バンコクも、もう少し住みやすかった。パンカビというバンコク市内に住んでいるが、その頃は、バンコク郊外の小さな町にすぎなかった。学生でお金があまりなかったので、近所の土地をもった中国人の人が、野菜を作ったり、魚をとったり、自由にさせてくれ、食べ物を買う必要は全くなかった。

両親は今でも田舎に住み、父はトックトックの運転手をしている。自分の土地がないから、生活はそんなに変わらないが、まわりではバンコクから人が来て、海老の養殖をしたり、農地を買ってコンドミニアムやホテルを建てたり、どんどん変わっている。

経済発達により気持ちよく便利になった。しかしタイでは、金持ちと貧乏人の差が一段と開いてきている。幸せになっているかって？幸せは心の問題だから、心にとっては悪いことばかりだ。老後は自分も田舎に住みたいが、しばらくはバンコクにすることになるだろう。子供の教育もバンコクで、ということにならざるをえない。でも、人のことを考えられるやさしい子になって欲しいから、仏教の教育のために寺によく行かせたい。

コメンさん (JVC 農村開発)

ベチャブーン、ピサノロックといった新しい所今まで、開発の波は押し寄せている。以前はテレビや車が増えた、といった程度の目のつき方だったが、最近、そんな田舎にも大きな工場ができたり、土地を買いにくる人が増えてきた。田舎での農業がうまくいかず、バンコクに来る人も増える一方だ。

最近身のまわりに起こったことといえば、ついおととい、妻の姉がマカサンのビルの建設現場で働いて、杭を打ち込む作業中、鉄パイプで手首の怪

我をした。こんな危険なことも、田舎で昔ながらの生活をしていたら起こらなかった。昔は、これがだめなら、こっちと、いろいろな選択ができたが、今では一ついきづまると、道ふさがりで、どうしようもない。人間関係も複雑になって、ちょっとのことでいらいらしたり、プレッシャーが多くて、人を殺したり、心理的障害を持つ人が多くなった。何か良くなったこと？なんにもない。タイの最近の変化について考えると、悲観的にならざるをえない。

タイでは、最近の経済発展が、このままではいたいどうなってしまうのだろうと、恐怖として住む人の目に映る。その中でも、心を大切にすると人だから、“人”の変化は特に強く感じるようだ。こうした変化の後ろには、日本という国が日本の経済進出という形で、また、追いつきたいというタイの目標として、はっきりと見える。近代化で私たちが失った物を彼らにも同じ経験をさせるのでなく、こちらが学んで一緒に保存していく道を真剣に捜さなくてはならない、と痛感する毎日だ。

タイの近代化

今タイでは、「NIESに入れるようにがんばらなければならない」という声をよく耳にする。バンコクも近代都市をめざし急激に変貌をとげている。

「近代化」とは何だろう。もちろんこれはただ時代の流れのことだけいうのではない。時代が変わるとともに人間も自分の能力を発揮し、新しい技術によって便利で楽な生活を築いてきた。

タイの近代化は十数年前から始まった。1970年代、ベトナム戦争が終ってアメリカ軍がタイにたくさん入ってきたころだった。あの時からタイでは、技術的なことだけでなく、経済や社会、人々の考え方や生き方すべてが昔と変わった。

私もタイは近代化しなければならないと思っている。しょうがないことだと言えるかもしれない。たったこの10年でタイはずいぶん変わってしまい、技術も信じられないほど進歩した。以前と同じように何も変わらぬ状態に留まることは不可能だと私は思う。けれどもこの変化の中で、タイはいろいろ大切なものを失ってしまったのではないか、何か問題が起こっているのではないかとの疑問がわく。

タイの近代化が一番わかるのはバンコクである。ほかの大都市と同じように、高層ビルが立ち並び、

キーラティワン マーナチャイチャン (名古屋国際センター)

大通りには人と車があふれている。技術革新が進み、衣食住のための設備も整い、人々の生活は楽になった。しかし、こんなに便利になったのにバンコクの人の表情は疲れて見える。社会の発展にともない競争が激しくなったせいだろうか。

タイの一番主要な輸出品は米で、タイの労働力の68%は農業に従事している。したがってタイは工業化をめざすのではなく、農業を中心にしなければならぬともいわれる。農業生産を高めるために、新しい技術や機械も導入された。しかし、森林の乱伐による自然破壊、世界市場によって動かされる農産物価格など、タイの農民たちはさまざまな問題を抱えている。

タイの地方に行けば美しい自然、タイらしいやさしさに出会えて、「ちょっとだけでもほっとできる」という人が少なくない。そして「田舎の人は都会の人よりしあわせだ」と。便利な設備はほんとうに必要なものなのだろうか……。

タイの近代化は今後も進むだろう。しかしそれはタイにとって一番ふさわしい方法で行われなければならない。タイの文化とタイらしさを守りながら、農業国として発展していくのがふさわしいと思う。

(原文は日本語)

意外なミゾがあった日本とタイのNGO

岩崎駿介

先日11月24日、タイ・チュラロンコン大学のスリチャイ先生の招待を受けて、日・タイ民衆交流フォーラム第四回年次総会なるものに参加する機会をえた。ここでは、その会議の紹介とそこで得た私なりの感想を述べてみたい。

日・タイ民衆交流フォーラム

会議は、日本、タイ両国が企業を中心としての経済的結びつき、あるいはODAを中心としての政治的な結びつきを強めるなかで、市民同士、普通の人間同士もっと交流を深めなければならないという視点にたち、その人的交流の先端的役割として、NGO間の交流をどう強化しようかについて話し合われた。

会議はタイ語日本語の逐次通訳で進められた。在タイ日本NGOのスタッフや学生や主婦などの日本関係者の出席に比較して、タイ側NGOの出席者は少なかったが、それでもタイボランティアサービスのデートさん、タイの農村生活改善研究所（Village Institute for Training and Alternative Living）のコーソンさん、あるいは国会議員のニコム氏、元カセサート大学学長のラビー氏などの参加を得て、朝9時から夕方6時まで熱心な討議を続けた。

午前中は私の基調報告、アジアの売買春に反対する男たちの会の谷口和憲さんの報告があり、午後は「NGO」、「ODA」、「出稼ぎ労働者」の三つの分科会に別れて討議を行った。私は、まず第一に「タイは収奪される国から収奪する国へと変化しつつある」と指摘し、したがって、タイNGOは周辺国であるビルマ（ミャンマー）、ラオス、カンボジア、ベトナムの人々との協力関係をより強めねばならないことを強調した。しかし、第二にタイ国内においても換金作物栽培による環境破壊は深刻なので、農村と環境問題に対しては今以上に取り組んでいかなければならないと提案した。

これに対して、スラムで活動続けるプラティープさんから、スラム問題も今だ深刻であり忘れてはならないとの指摘がなされた。日本人のタイにおける売春問題、タイから日本への出稼ぎ労働者問題、さらに日本のODAのタイ国内における役割や結果について活発な議論が展開されたが、会議全体を通

して私が強く感じたことを、以下に整理したい。

タイと日本のNGOのミゾ

まず感じたのは、一言でいえばタイ人と日本人との間のミゾ、極端に言えば相互不信ということである。とりわけ互いに協力を模索しようとするNGO間の相互理解が不十分であるということである。

タイのNGOの人々にとって、日本人がなぜタイに来てNGO活動をやるのかが明確になっていない。JVCタイランドの希望の星、コメン君も立ち上がって発言し、「私は日本人と共に働くということについて十分な確心をもっているし、なんらやましいところはない。しかし、タイの友だちに『お前はどこで働いているのだ』と聞かれたときに、日本のNGOで働いているのだと答えるときに生ずる気まずさが煩わしくて、ついタイ人同士の交流の場から足が遠退いてしまう」とその心を披瀝したとき、タイの出席者は「なるほど」と同感を得ているようであった。

つまり、タイ社会における日本は、次のような状況になっているのである。両国の政治的、経済的な関係が強まるなかで、タイの農民は「日本は豊かな国で、その作る製品もすばらしい」と思っている。しかし、NGOの人たちはタイにとっての日本の役割を冷静に受け止めており、両国の政治経済的関係の強化は日本の利益にこそなれ、タイ社会にはためにならないと考えている。そして、そのような悪魔的な日本から「なぜ日本NGOがタイにやって来るのだ」、自分の悪を棚にあげて「助けてやるのだ」という行為は、タイのNGOの人たちにとってどうしても納得がいかないのである。

経済的に豊かな日本からズケズケとタイにやって来る人たちとは、協力したくないと考えているようである。これは、お昼休みの時に二人のタイ人から、日本のある団体とタイのあるお坊さんが協力して農村運動をやったがこれが失敗したという、くしくも同じ例を聞き、この人たちは日本の団体を心から、いまだに信用していないという観点を得たのである。

しかし、このような誤解はタイ人の日本社会に対する理解の不十分さからくるのだと私は思う。もう少し極端に言えば、これは日本社会への理解不十分

さからくるタイ人の一種の「ひがみ」であると思う。実際、タイのNGOの人たちの間でも、日本に来て日本を見た経験のある人と、日本をただ外から眺めている人との間には日本理解に大きな差があるのだ。日本のNGOに不信の目を向ける人たちは、日本社会内部の矛盾に気づくことが出来ないが故に、ただ「なぜ、そのような豊かな国からやって来るのだ」と思ってしまう。実は、日本社会もタイ社会と同じように矛盾を抱え、日本のNGOはタイのNGOの人たちとその問題を共に考え、乗り越えようとしているのだということが理解できないのである。同じ地平に立っているのだということを、いまだ実感できないが故の誤解であると思ったのである。

相互理解のために

これに関連して、私が思い出し、かつこの会議でも印象的であったのは、まず先に記したJVCタイランドのコメン君が日本に来たとき、彼は日本の経済的豊かさに驚くこともなく、あれこれと日本の事情を見るにつけ、同情の念を深くして帰国したということ。また、今年1月に来日したパイ村長（本誌4月号参照）は、タイ農村の自立的運動に邁進してい

るが故に、決して先に見たNGOが持つ「ひがみ」などおくびにも出さず、「より良い社会を目指して、共に頑張ろう」とむしろわれわれを元気づけてくれたこと。さらに、この会議の中で、ある日本人参加者が発言したように、「曹洞宗ボランティア会は真のタイを日本に紹介するため、『田舎の教師』など優れたタイ映画の上映会を日本で行っているが、これと同じように『経済的に豊かな幻想としての日本ではなく、より厳しい日本の現実』を知ってもらうため、日本の現状をえぐり出した優れた日本映画の上映会をタイで企画すべきだ」という建設的提案の三つである。

私は、タイと日本のNGOが毎日活動を共にし、分かち合っているのだと思っていたので、このような誤解がまだ奥深くに存在していることに驚きました。しかしこれをすべて相手のせいにしてしまうのではなく、私たちも十分にこころし、決しておごりがあってはならないのです。

読者の皆さん、タイにおける日本映画の上映会などの企画をやって見ませんか。まだまだ、いろいろな面白い工夫が出来ると思います。

タイNGOの歴史

第一期（～1973）

タイのNGOの歴史は四期に分けられる。第一期は1973年10月のタイ民主化運動が始まるまでの時期である。政府は政府と関連する組織以外は認めず、あえてNGOというなら、県の文化協会や赤十字組織などがそれに当たる。独自に活動するNGOもないわけではなかったが、常に共産主義ではないかと疑われ、当局から監視されていた。

第二期（1973～1986）

第二期は民主化運動が高まり、その後市民運動への弾圧、緩和政策へと続く、1973年から1986年までの時期である。この時期、NGOも人々の民主化要求を反映し、政治運動化していった。特に、バンコクと地方との経済格差から生まれる不平等に目を向けた農村改善運動は、政治的色彩を持ちやすかった。しかし1976年、タイの共産化を恐れた軍によってクーデターが起こされ、NGOの活動も制限されることになった。このクーデターで4,000人も人が投獄され、再び政府関連以外のNGO以外は認められなくなった。

この弾圧があまりに厳しく、かえってゲリラの活動を激化させたので、1977年には弾圧緩和政策が打ち出されることになった。1980年、プレム首相は森に入っていた人々に

「子供財団」支援グループ・「タクライ」のニューズレターより
スリチャイ・ワンゲオ、チュラロンコン大学准教授のお話＜要約＞

帰還を求め、「皆でともに国内問題を考えよう」と呼びかけた。

第三期（1980～1986）これ以降

そしてこれ以降再びNGOの活動は活発化する。この、1980年からタイ経済が急成長をとげる1986年までの時期が第三期である。栄養失調児のためのプロジェクトや児童労働問題に目を向けた子供財団、スラムで教育活動を始めたプラティーブさん、そのほかTVS (Thai Volunteer Service)、PDA (Population and Community Development Association) など150ものNGOがこの時期に生まれた。

第四期（1986～）

現在は第四期に当たる。1986年以降急激にタイ経済は発展し、NIESに追いつく勢いである。地域格差、経済格差は開く一方なのに、これまでタイのNGOに資金援助をしてきた欧米の財団や個人がタイへの援助を控えようとしている。しかしタイのNGOは国内での資金基盤が弱い。資金不足のためプロジェクトの中断・縮小を余儀なくされたところがあるという。

〔資料〕

統計に見るタイの現況

好調なタイ経済

タイ経済は60年代約8%、70年代約7%と着実に経済成長を続けてきた。80年代に入ってもその傾向は続き、特に89年は12.5%を示し、90年も10%前後の成長率を見通している。これには外国資本、とりわけ日本や台湾などの輸出志向型投資がタイ経済のけん引車となった。輸出振興による外貨収入の増加は内需拡大や設備投資の増大につながり、さらに輸出の拡大に結びつく。86年以降の輸出額は毎年20～30%の割合で増加し、輸入も87年、88年は40%前後の伸びを示した。この大幅な輸入増は原料、中間材、資本財などの増加によるもので、工業化が促進されていることがわかる。輸出品も年々工業製品の割合が増えており、NIESへの接近を示している。今後インドシナ三国、ビルマなどが戦場から市場へと変われば、さらに経済成長が見込まれる。

経済の発展と経済格差

しかしながらこれらの経済成長は、持てる者と持たざる者の経済格差を増大させた。表1でもわかるように富は首都圏に集中し、首都圏を100とした場合、地方における所得の割合は確実に下がっている。そして農家の平均経営面積も、農地が拡大したにもかかわらず減少している。^(表2) ただ農業生産高についていえば1960年代以降飛躍的に伸びているが、これは森林を畑地に開拓していったもので、1960年当時には国土の40%を占めていた森林面積は1984年には30%を割った。また、急激に生産を伸ばしたタピオカなどの換金作物は単一栽培なので、土地を疲弊するのも早く、肥料や農薬を買うために借金に苦しむ農家も多くなった。

かつての農民の暮らしは、自分で食べるだけの米を栽培し、副食は森や家のまわりから採取するなど豊かな森の恵みに囲まれて生活していた。しかし今では森を失うのと同時に貨幣経済が浸透し、出稼ぎなどによって送金しなければ生活が成り立たなくなった。

対日関係

現在のタイ経済の発展を語るうえで、日本は大きな役割を果たしている。日本はタイにとって最大の貿易相手国であり、援助国である。

タイを訪れた日本人がまず驚くのは、あふれんばかりの日本製品と日本企業の看板である。自動車や家電、どらえもんのキャラクター商品にいたるまで日本製品がどこにいても目につく。1987年の資料によると、日本は輸入相手国の第一位、輸出相手国の第二位を占めている。日本からの輸入のほとんどが工業製品で、機械機器だけで全体の50%を占めている。一方輸出品は食料品が最も多く42%、次いでゴムなどの原料品が28.6%である。食料品は日本で問題になっているエビや鶏肉の割合が高いが、キューリやサヤエンドウなど一般的な野菜、米菓のあられなどさまざまな食品が日本に深く入りこんでいる。

タイ側からの対日輸出は、前年に比べ87年は29%、88年は53%の伸びを示したが、輸入も87年は45.5%、88年は74.7%と急増し、88年は24億ドルもの対日赤字となった。

日本からタイへの直接投資も突出している。特にこの2～3年の伸びはめざましい。外国投資に占める日本のシェアは77年35%、81年31%だったが89年は44%にもなった。〔タイ政府投資委員会(BOI)の認可を受けたもの〕この年の投資総額は906億バーツ(約5000億円)にのぼり、これは60～84年までの総額、449億バーツの2倍である。円高を契機としたこのような急激な直接投資の増大は、日本からの資本材、中間材の増大を招いているが、新規進出企業のほとんどが輸出志向型であることから、タイ政府、財界とも長期的にはタイの輸出拡大、経済発展に寄与するものと見ている。現在日系の進出企業は1200社、在留邦人は2万人を数える。

タイの高度成長を支える日本企業であるが、工場用地やリゾート地と次々と買い上げることによって地価の急騰を招いている。昨年1ライ3万バーツだった土地が今年は10万バーツ、1ライ7万バーツだった土地が200万バーツと、農地に法外な値だんがつく。家賃が高騰した都心でも、スラムが次々とタウンハウスなどに建てかえられ、庶民は住めなくなっている。

日本のタイへの経済協力は、第二次大戦中に日本がタイで発行した「特別円」の処理のための準賠償(1955～1969)に始まった。71年以降は無償資金協力に引きつがれ、現在は有償協力(円借款)、技術協力などともに実施されている。特に1978年末のベトナム

実質経済成長率

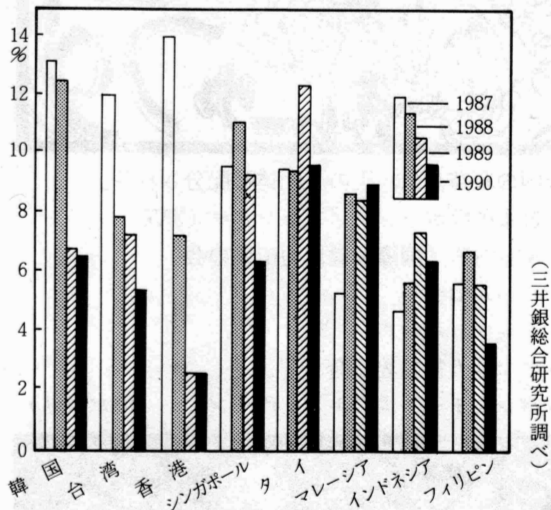
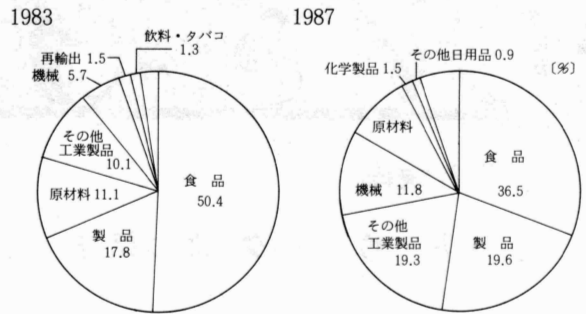


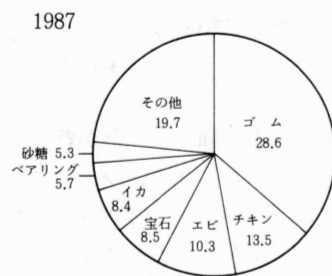
表1 地域格差の現状

		首都圏	中央部	東北	北部	南部	東部	西部
(一人当たりGDP)	1975	18,827	6,291	3,527	5,388	5,899	9,541	9,344
	1980	42,155	11,333	6,257	9,585	12,710	19,220	15,832
	1985	59,003	16,749	8,124	13,353	15,358	25,603	21,047
(格差率)	1975	100.0	33.4	18.7	28.6	31.3	50.7	49.6
	1980	100.0	26.9	14.8	22.7	30.2	45.6	37.6
	1985	100.0	28.4	13.8	22.6	26.0	43.4	35.7

タイの輸出品目



対日輸出品目



(表2) タイ農業と森林面積

	全 国			中 央			東 北		
	1962	1973	1985	1962	1973	1985	1962	1973	1985
森林面積	171,018	138,467	93,158	35,393	24,379	15,761	44,315	31,669	15,140
農地面積	69,682	107,406	128,603	19,381	26,087	28,987	26,412	48,974	55,363
農家の経営面積	21.54	27.97	26.36	25.92	33.27	32.35	21.62	31.50	27.08
農家の戸数(1000)	3,214	3,911	4,878	723	778	896	1,220	1,605	2,044

(表3) 対タイ商品別輸出額

(1000ドル)

対タイ商品別輸入額

	1985	1986	1987	1988
総 額	2,030,393	2,029,683	2,953,264	5,160,671
食 料 品	24,343	42,164	42,859	88,725
原 燃 料	25,947	29,059	37,304	84,166
工 業 製 品	1,960,878	1,932,666	2,839,245	4,917,872
(機 械)	(1,102,041)	(1,069,488)	(1,682,084)	(3,202,526)
総額の前年比(%)	△16.3	0.0	45.5	74.7

	1985	1986	1987	1988
総 額	1,026,908	1,390,904	1,795,996	2,952,206
食 料 品	402,165	645,632	783,617	1,143,483
原 燃 料	338,969	376,470	482,952	767,118
工 業 製 品	276,766	359,171	513,491	819,732
総額の前年比(%)	△1.2	35.4	29	53

(日本通関統計)

ム軍のカンボジア侵攻により、タイは「前線国家」として優先的にODAを受けとることになった。

87年、タイは日本のODAの二国間援助の5.8%を占め第6位(3億ドル)、また、近年タイにおける日本のODAは全体の3分の2に達している。

民間による援助も、JVCをはじめいくつかのNGOの活動の起点が、インドシナ難民の救援ということ

もあり、タイとは縁が深い。昨年初めて実施されたODAのNGO補助金の実績を見ても、8258万円の補助金のうちタイ関係は5件、2298万円で全体の27%を占める。また現在タイで活動するNGOは29団体で1位、2位がフィリピンの24団体(『NGOダイレクトリー』-NGO活動推進センター)である。

〔取材協力 タイ支援グループ〕



今年も快晴

ポート・ウォーク よこはま

11月3日、第4回ポートウォークよこはま'90を開催した。例年より約1カ月ほど遅れたが、今年も「絶対、晴れる」ポートウォークのジンクスどおり快晴の1日だった。参加者は、去年なみの約700人だったが、今年は、カナダから来日中の車椅子マラソンの元世界チャンピオン、リック・ハンセン氏夫妻や、駐日カナダ大使御夫妻などが参加し、この催しを盛り上げてくれた。また、フリーマーケットも盛況で、おなじみのエスニック料理は全て完売、JVCのカレンダー、カードもたくさん売れた。あとは、どれだけの寄付金が集まるかが気になるところ。

今回の収益金は、次の6団体に配分される。

- 日本国際ボランティアセンター（JVC）
- SHARE（国際保健協力市民の会）
- サヘルの会
- シャプラニール
- アフリカ行動委員会
- パレスチナ子供のキャンペーン（清水俊弘）



飯島かなさん

来年の1月から、国連車両管理プロジェクトの運営スタッフとしてカンボジアに赴任する飯島かなさん。これは国連所有の車両を同国内のNGOに貸し付ける事業で、JVCが国連から管理運営業務を依頼された。当地の自動車技術学校の実績が評価されてのことだ。飯島さんはアメリカで足かけ6年経営を学び、今回はその英語力、管理・

第三世界への協力は自分への投資

交渉力が買われての決定だった。 るわけです」

「アメリカ留学中もずっと第三世界支援のボランティアをやっていました。帰国後も活動を続けたくていくつかNGOをあたってみたところ、JVCが私の関心、私の考えているやり方に一番会っていたんです」

納得したのは、JVCの幅、柔軟性、そして10年間に何人もの人を出してきた実績だという。

「第三世界への協力は、結局日本の、ひいては自分の将来のための投資だと思うんです。現在の日本の第三世界とのかかわりは健康的でない。それを少しでも健全な方向へ持っていくために、自分の労力を投資してい

「目下の課題はクメール語。私の任務上、欧米のNGOのメンバーとの接触が多くなりますが、努めて現地の人たちと交わっていきたい。お砂糖の貸し借りができるような……。それにはまずクメール語。今はただ針金細工にしか見えないクメール文字も、早く読めるようになりたいです。それから、異郷で働いて自分のボルテージがどう上がるか、それも楽しみです」

JVCにもだんだんプロフェッショナルな人材が集まるようになりました。飯島さんの活躍も期待されます。

（荻野洋子）

JVC 研究部門の

設立について

第8回JVC総会において、事務局から「今後は理論的な面を加味しながら、第三世界の実状を伝えていこう」という主旨で市民国際研究所の設立をしたいという提案がなされましたが、株式会社の形で経営する点など、準備が不十分であるという意見を受け、執行委員会で再度検討することになっていました。そこで去る10月27日の第31回執行委員会において、事務局からの再度の提案をもと

にこの件が話し合われ、以下のような決定が下されました。

株式会社形式の研究所を新たに設立するのではなく、JVC内部に調査研究部門をつくり、4月1より活動を開始する。活動は独立採算で行い、他のプロジェクトに負担をかけないようにする。

研究所という形にとらわれず、実質的に業務を始めてみようというものです。具体的には都立大学博士過程在学中の東村康文さんを研究部員とし、最初の仕事としては、国土庁から500万円で委託を受け、『第三世界の生活キーワード』という本を作成する予定です。

JVC事務局長 林 達雄

JVCの本ができました

『NGOの挑戦』

上 1854円 (めこん社)
下 1957円

JVC10年の記録として『NGOの挑戦』が発刊されました。刊末には今までにJVCで活動した人たちの全員の名前が載っています。これまで中心となってJVCを作り上げてきたのは、この人たちです。

インドシナ難民流入のニュースを聞いて、とにかく現地に行きたいとタイにかけつけた学生たち。何もわからないまま自分たちにできることをと、少しずつ経験を積み重ねてきました。上巻からは、そんな若者たちの熱気や戸惑いを感じられます。下巻に入るところには、もうちょっと経験を積み、“仕事”として海外協力が身についてきます。第三世界で生活することを楽しむ余裕も出てきました。今活動の幅は国内に、地球環境に、広がっています。これからも試行錯誤をくり返ししながら活動を続けていくことでしょう。

なお、JVCの活動に参加されながらお名前の載っていない方、また間違われている方、まことに申し分けございませんでした。増刷の際には訂正しますのでご連絡下さい。

(購入御希望の方は事務局までお申し出下さい)



第5回 日本の食卓を囲んで



サラワクとサバの先住民が来日した。11月16日から11月23日まで、横浜にある国際熱帯木材機構(ITTO)本部で開かれた総会で、サラワクの伐採問題について討議されたので、森林伐採によって引き起こされた彼らの窮状を訴えるためにやってきたのだ。

11月14日、彼らの歓迎会を開いた。かんぴょうがいっぱいあったのでばらずし(日本料理)、北海道からかぼちゃがたくさん届いていたのでかぼちゃのプリン(カンボジア料理)とカレー(インド料理)、それとミートローフ(アメリカ料理?)というおかしな取り合わせの料理を手分けして作り、あとはスーパーでお惣菜と野菜を買ってきて盛り合わせた。

さて、定刻の6時半、キャン(先住民の1つのグループ)の民族音楽の流れるなか、サラワク代表者たちがうち揃って登場した。ウマバワン村のジョクさん以外はみな初めての海外、だから初めての日本だ。ビールで乾杯のあと、1人1人のスピーチがはじまった。

「日本人がこんなすばらしい食事を食べているとは知らなかった」とビサヤ人のライナスさん。

いきなり食事の話が出た。彼らの庭であり、食糧庫であり、墓であり、生活のすべてである熱帯林を壊す片棒をかついでいる日本人、日本には1本も木がないのでサラワクの森をかささらっていくと思っていたのにたくさんあるじゃないかと言われたときの恥ずかしさが思い出される。日本人は彼らと同じようなものを食べていると想像していたのだろうか。それとも日本にはサラワクより食べるものもないと想像していたのだろうか。

「息子がこんなにご馳走になったことを知ると、父が喜ぶだろう」とプナン人のジュインさん。

サラワクの村では一緒に食事をすることは、「これから私たちは本当のお友だちになりますよ」という意味をこめた最高のもてなしだ。ジュインさんの村に泊めてもらってご馳走になったとき、ご飯のほ

かにあったのは、やはり主食にしているサゴヤシのでんぷん(葛粉のようなもの)、キャッサバの葉の塩ゆで、スズメナスビ(直径1cmほどの小さいなす)の塩ゆでだけだった。料理の材料が調味料を入れても10種類を越えることがないのだ。私たちはおいしくいただいたが、それは短期間の滞在だからのこと、村では同じ献立が朝昼晩と、365日間えんえん続くのだ。

「ゆりこが村に泊まってくれたとき、村の食事をおいしいおいしいと食べてくれた。しかし、日本にきて、日本人がこんなものを食べていて驚いた。もしかして、村の食事はゆりこの口にあってなかったのではないか」グリーンピース・ジャパンの浜本さんが泊めていただいたケラビット人のジャギンさんは恥ずかしそうに言った。

その他の人たちのスピーチでも、食べ物の話が続いた。彼らは皮肉を言っているわけではない。食事に素直に感心し、感謝しているだけだ。しかし、私たちはだんだんいたたまれなくなってきた。お金にものをいわせてエビ、鶏、大豆、魚など数えあげていたらきりがないほどのものを世界中から買いあさっている私たち。日本人にしてみればかなり質素なこの食卓も、彼らにしてみれば豪華絢爛、世界中の畑や海からの略奪品の展示場だ。

世界中の産物を食卓に乗せている日本人に比べ、彼らの食卓に並ぶもののほとんどは自分で収穫したものだ。他の土地に住む人たちから何も奪わず、誰にも迷惑をかけないで生活しているどころか、地球の大きな財産である熱帯林をこれまで守ってきた。自分たちのために守ってきたのだけれど、結果的には地球全体のために守ってきたことになる。そしてこれからも守りたいと言っているのだ。

私たちも、そんな生き方を取り戻さなくてはならないときがきていると思いつつ、盛会のうちに歓迎会を終わった。

(岩崎美佐子)

JVCプロジェクト

1990年11月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 林 達雄(事務局長) 熊岡路矢, 星野昌子, 前川昌代, 山口誠史, 鈴木由子, 今泉 恵, 富安光子, 富安庸太郎, 柴田久美子, 高梨直樹 岩間邦夫
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内での渉外, 事業計画, 資金調達等を行う。 11月3日, 第4回「ポートウォークよこはま」を開催した。約700人の参加者が集まった。 11月21～23日, 関内のマリナード地下街で管洋志写真展を開催した。		清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト 「ポートウォークよこはま」のフリーマーケットで「インドシナ料理の会」を進めているボランティアが, カンボジアのデザート, サンカヤ(カボチャのプリン)を販売し好評を博した。また, ステージでは, イム・キムスールさんを中心としたカンボジア舞踊のグループ8人が「ココナツダンス」を披露してくれた。 11月10日, ラオス語ニュースレター「ビターヤ・サーン・ラオス」第4号を発行した。なお, 「ニュースレター・クメール」第1号(カンボジア語のニュースレター)と「もしもしあのね」第13号は, 10月に発行された。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, ケアハウス さくら苑, 明るい社会づくり運動 神奈川県協議会	小野豪大, 他約60人
環境	●植林 タイのチャブーン県で植林センターの建設にとりかかった。 ●国際会議の開催 タイ東北部で農民会議「農業と環境」を開催するため準備を進めている。 ●調査・研究 カンボジア, ラオスの農業省森林局に伐採・植林状況をインタビューした。	国際開発高等教育機構(FASID) 庭野平和財団	岩崎美佐子
エチオピア (東ゴジャム州) ビチュナ	●ビチュナ緊急救援活動 東ゴジャム州青ナイル川沿いの低地斜面は慢性的な干ばつ被災地でありながら, あまり知られておらず, 外部からの支援を受けることがなかった。JVCはカナダ政府, WFPから食糧を入手し, フード・フォー・ワーク(労働などの代価を食糧で渡す)形式で食糧配給, 栄養失調児に対する保健栄養指導を行っている。 第1回食糧配給: 5月 対象者: 3万人 第2回食糧配給: 8月 : 7万人 第3回食糧配給: 11月末 : 3万人 同時に村の復興の準備として, 道直し, 泉の保護, 植林などの作業を始めている。 ●農村の総合的復興促進 来年2月の段階で, 復興計画再開の地域を決定する。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, モ ラロジーMIRC, 東京グリーン・ ウォーク, 西本 願寺, Tree for lifeの会, 中部 善意銀行, 毎日 新聞社会文化事 業団, JVCカレ ンダー, メサイ アコンサート, エチオピア救援 バザー	山田 盛, 江原浩昭, 江原広美, 田尻真由美, 寿賀一仁, Solomon, Shikur, Ali, Tekleyohannes, Yodit

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲトー郡) ハルバ・キャンプ (ゲトー郡)	●農業による自立促進 9月26日に起こった反政府軍による車両掠奪事件以降、ルークの町は依然として緊急状態にある。JVCをふくめ外国人はルークを出ており、また車両も相変わらず自由に使用できる状態ではない。 予定していた最後の2つの受益者グループには、JVCコンパウンドでのポンプオペレーター・トレーニングの後、それぞれポンプを自分たちで農場に運んでもらった。 11月下旬には雨も降り始め、農民は作付を開始した。植林が必要な農場はまだ多く、コンパウンド内の苗床の苗木の育成も順調ではあるが、この治安状態が改善されない限りは配布のめどが立たない。	UNHCR, メサイアコンサート	磯田厚子, Siyad Mohamed Musal, Muhubo Mohamed Aden, Rashid Mohamed Rangale, Mohamed Alasow Owke, Hire Abdi Digale
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 8月末以降、ジャララクシには役人やポリスコマンダーらがいないため、地元民と難民が協力して自治を行っている。 10月9日から雨期が始まった。順調である。農民たちは作付けを始めている。今回はメイズよりもゴマが主に栽培される。 治安悪化のためガソリンスタンドに燃料がほとんど入荷されず、恒常的に燃料不足である。一部の農民はジュハールまで買い出しに行っているという。 ●家畜プログラム 先月と同様に死産、または産後死が多く、先月末31頭だった子供が25頭にまで減ってしまった。例年がない病気の大発生であり、JVCだけでなく、ジャララクシ、プロブルテ付近の家畜はおおむね被害を受けている。下痢と寄生虫が原因とわかったので薬を購入することにした。	UNHCR, R.I. Japan	船川秀夫, 船川三貴子 Shuqri Abdi Ali Abdulahi, Mohamed Mohamud Mohamed
カンボジア カンボット県 プノンペン市 カンダール県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し、①ワークショップ(修理工場)の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面、技術・理論面で協力し、第一期、第二期と訓練を行ってきた。 輸送公社には現在100台余りの日本製トラックがあり、JVCが部品を供給し、現地の自動車整備士が修理、メンテナンスに当たっている。 ●RINE(ライン)プログラム〔母子保健活動〕 母親教育、危険な妊娠の発見と早期移送、分娩等に携わる助産婦の訓練や医療器具・医薬品の供給などを行う「母性保健」と、小児発育検診や検診で表出された栄養失調児のケアを行う「小児保健」活動を行っている。 ●井戸掘り・給水 バッタンバン、バンティミエンチェイの両県で、内戦により国内避難民となった人々のために20本の井戸を掘る。この緊急援助活動は7月から始められ、現在までにバタンバンで5本の井戸が完成した。一方、通常の計画に沿ってコンボンチュナンで5本、カンダール県で5本、プノンペンで3本の合計13本が今年に入って掘られた。	創価学会青年平和会議、モラロギーMIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会(SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、「第1回カンボジア・クラシックコンサート」、真如苑、「武蔵野市100周年キャンペーン募金」、生協ひろしま、銀座ライオンズ	古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄 「現地の実施・調整機関と主な担当者」 (運輸省) 国際局 Meas Semeth 自動車輸送公社 Thach Cang (保健省 母子保健局) Ann Sarun 医師 保健委員会 Nhim Nhem 医師 プノンペン郡 保健事務所 Sam Sarung 医師 母子保健活動 Tui Kath Mat Samon (農業省 水利局) The Iv Khim 井戸掘り活動 Hok SETHA So Sarin クラブ、メサイアコンサート

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 ・Mae La, Don Pa Kiang, Wang Ka, Maw Ker の4つのビルマ少数民族とカレン族の難民キャンプを視察。現在、ビルマ国境に4万4,539人の難民がいる。タイ内務省は、バンコクにいるビルマ人学生のためのキャンプ設立を予定している。 ●奨学金プロジェクト 10月26～29日、カンチャナブリで奨学生対象のキャンプを行い、35名が参加した。 ●クロントイ図書館 ラオスのスタディツアーの一行がクロントイを訪問。	全国社会福祉協議会 メサイアコンサート Tree for life の会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジーMIRC	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, 大石道子, Manas Torkan, Suntaree Lawsuwan, 池島千津子、主婦ボランティア15名 Samruay Jongyorklang,
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 ドライビングコースは仮免試験の段階。他団体の協力を得て、キャンプ内を走る。 かじ屋コースでは農具の試作を行い、他団体の農業コースとつなぐ計画。 竹細工と魚網コースは、障害者のために病院へ出向いて教える用意がある。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	Somyot Rattana-tham, Sutthi Netprakhon, 井本勝幸、井本美奈,
パナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 11月10日、52ケース、147人のラオス難民がナポーキャンプから到着した。生徒数は9クラスで98人。	IOM	竹村雅義、熊沢ゆり、 岡村達司、蘭牟田浩美、 Chowarite Duang-prom
ブリラム県	●農村開発 チャブーンでの環境プロジェクトのため土地を購入し、野菜等を植え始めた。 ブリラムでは、農民が生協の運営に力を入れている。	モラロジーMIRC, JOFIC, JVC カレンダー	Komain Soongsu-man, Thongkham Sumruengram, Chowarite Duang-prom
ラオス ヱィエンチャン 県 ボーリー・カム サイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。 現在各県で普及員による村人を対象にしたトレーニングがJVCの建設した母子センターで行われている。カンムアン県ではタイのNGOATAの協力のもと、普及員と村人を対象に井戸掘りトレーニングを1週間にわたって実施した。 また、今年2月に引き続き、11月16日から29日まで普及員の東北タイ・スタディツアーを行った。	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団, NVC, 日産労連, ギャラリーイカ ット、聖ヨゼフ 老人ホーム、老 人ホーム天寿荘 難民と地球の緑 を考える会、グ ループ・カンガ ルー、メサイア コンサート、	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子、 Thanongsi Solankum, Maliphet Sukkhasume （ラオス女性同盟） Khamone Phetdao- heuan, Khamphone Saigna- vong JOCV, JVC カレンダー
ベトナム ホーチミン市 ハイフォン市	●地域総合復興（南部） 7月からホーチミン市第8区の「ヒーボン」スクール、夜間学級、病院/保健所への設備改善支援を開始した。ビンチャン郡では病院への医療機器援助を行うとともに、「フォンフー」小中学校で3教室改築を開始した。 ●帰還難民のための職業訓練（北部） 10月2日、UNHCRとJVCとの間のサブ・アグリメントが調印され、10月29日JVCベトナムチームが現地に向かった。	UNHCR, 庭野平和財団	熊岡路矢、中野周二、 稲見 圭 Le Thanh Hai Nguyen Trang Thu （現地の受け入れ機関） UNHCR ハノイ ハイフォン市 Nguyen Luong Trao

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員: 東京 5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E: 東京 3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい)

▶ **みなさまの募金が支えるJVCの活動**—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民募金** (11月小計 186,413円)
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (11月小計 505,948円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **カンボジア募金** (11月小計 65,630円)
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. **タイ募金(奨学金・スラム・農村)** (11月小計 93,100円)
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. **ラオス募金** (11月小計 461,270円)
ラオスの生活改善、プログラムに使われます。
- F. **ベトナム募金** (11月小計 24,000円)
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. **定住難民募金** (11月小計 501,000円)
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使われます。
- H. **環境募金** (11月小計 16,500円)
環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. **JVC運営経費募金** (11月小計 5,600円)
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (11月小計 1,538,301円)
▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京 9-27495 (募金種目名をご記入下さい)
加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶ 私たちが子供のころあって今はないもの。それは時間だ。自分が大人になったから忙しくなったというのではなく、今は子供も忙しい。塾や学校に追いまわられている。もちろん大人も忙しい。深夜に帰宅するおとうさんは珍しくないし、おかあさんだって仕事に家事に忙しい。(すでに夫が家事をすることはあきらめている)世界中から「ヤスメ、ヤスメ」といわれているがなかなか休めない。そんなに働いてどうするのかというと、せっせと貯金したりしている。そのお金は銀行が第三世界の国々に貸しつけ、ODAなんかはその支払いに使われたりする。もう働くのはほどほどにして、日本中の家庭が一家で晩ごはんを食べるようになれば、世界はもう少し住み良くなるでしょう。(ま)



犬養道子・「みどり一本」募金

東京 0-212497 (11月小計 185名 1,047,173円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1990年12月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島 3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (助)神奈川国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。